

山口県史だより

第30号／平成25年11月

特集 幕末日本の軍事力—長州と幕府—



【下関砲撃図 縦 20cm ×横 25cm W078/1014 (英国公文書館 National Archives 蔵)】

この写真は、文久3年(1863)5月に関門海峡を揺るがした長州藩の外国船砲撃及び翌月の米仏による報復攻撃の際の各艦船の航跡などを、英国の軍人F・ブラインが描いて本国の陸軍省に提出した地図です。左上の楕円の中には「NOV12 1864」と英国陸軍省の受領印が押されています。

特集 幕末日本の軍勢力―長州と幕府―

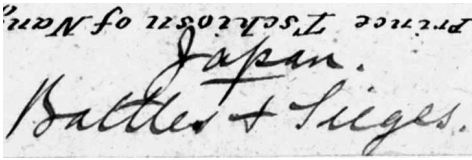
ペリー来航の一〇年後、文久三年（一八六三）五月十日を期限に「攘夷実行の幕命」が下されました。この幕命に唯一反応した長州藩は、関門海峡を通過する外国船を砲撃しました。翌元治元年の四か国連合艦隊による報復攻撃はよく知られていますが、実は、長州藩は砲撃の翌月に早速報復攻撃を受けているのです。

表紙の地図はそのときの様子を描写した貴重な記録です。今回の特集では、この地図を手掛かりにしなが、当時の日本を取り巻く状況について考えてみたいと思います。

■長州藩単独の外国船砲撃

表紙の地図を見ると、左上に「JAPAN」の文字が、そして中央部には「SIMONOSEKI」の文字があります。その他にも「NAGATO（長門）」「BOOZEN（豊前）」「KOKURA（小倉）」「SUWONADA SEA（周防灘）」といった、私たちに馴染みの深い地名を読み取ることが出来ます。また「HIKUSIMA」は今の彦島のことです。攘夷決行以前はこのように「引島」と呼ばれることもありました。なお、戦いに臨んで退却を連想させることから、長府藩主毛利元周もとちかの命令で「彦島」と改められたという説があります（「長府毛利家乗」）。さらに、中央上部にある「Japan Battles & Sieges（日本戦闘と攻撃）」の走り書きからは、当時の緊迫感が伝わってくるようです。

この地図でとりわけ興味深いのは、海峡封鎖に当たった砲台



表紙地図：文字部分（中央上）の拡大図
※上下反転しています

の配置です。下関周辺に、濃い赤色で描かれた印がありますが、これが砲台を示しています。それぞれに記された数字は、この地図を描いたF・ブラインが確認した大砲の数で、下関の砲台の数は七、大砲は二七に上りました。一方、対岸の「豊前」側に砲台は見えません。少し先の「小倉」には一つの砲台に一五門の大砲が観察されていますが、この大砲が火を噴くことはありませんでした。このように、外国船砲撃を実行に移したのは、長州藩だけだったのです。

■日本の軍勢力の外面的な弱さ

この外国船砲撃は、長州藩の完全な失敗に終わりました。それでは、攘夷行動の足並みが揃えば攘夷は実行できたのでしょうか。当時の日本の軍勢力が外国人の目にどのように映っていたのかを、仏国海軍士官J・ジュリエの覚書を通して読み解いてみましょう。

彼が着目したのは、外面的な弱さでした。つまり、日本の軍勢力は西洋のモデルの表面だけをコピーしたものにすぎないと指摘しています。



表紙地図：下関付近の拡大図

そのくせ、日本人は「教えたがり」だという洞察もあります。結果、浅薄な知識を持つ者を次々と生んでいるのだと言うのです。

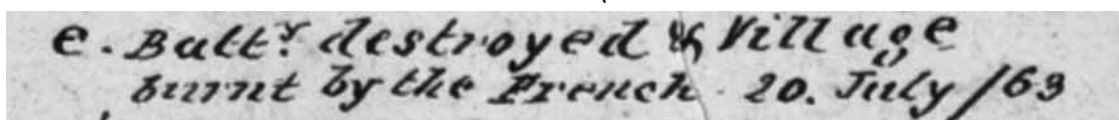
さらにジュリエは、軍事的な物量や品質の水準の低さを、次のように記しています。

「大君のヤクニンたちの一部自身が、いまだに白兵戦用の武器を身に付けており……」

地図上には、こうした日本の弱さを裏付ける記録も見付けることができます。例えば、右端の米国の旗から伸びる赤い点線は、翌月に報復攻撃を行ったワイオミング号の航跡を示すものですが、この攻撃によって、長州藩は持てる軍艦のすべてを失いました。また、海峡の入口に見られる仏国の旗は軍艦二隻により報復攻撃が行われた地点を表していて、中央下に「Battery destroyed & Village burnt by the French (仏国軍による砲台破壊と村の焼払) 20 July/63」とその成果が記されています。

ところで、ジュリエは、これらの弱さが克服されるのは時間の問題だろう、と予想しています。

「もし日本人がこれ(施条砲)を持っていたら、彼らは再び無敵になります、それを所持しない以上、



表紙地図：文字部分（中央下）の拡大図

仏国に立ち向かうことなど思いもよらないのです。仏国に対する畏敬の念と、いかなる対応を払ってでも、お手本とするための施条砲を手に入れたいという欲求が、七月二十日(文久三年六月五日)の直接的な効果です。」

つまり、今回の戦争は、日本に武器を売りつけるチャンスである、と本国に報告しているのです。しかし、我が国の軍事力には、なお致命的な問題がありました。

■致命的な問題はソフト面の弱さだった

ジュリエの予想どおり、この事件をきっかけとして、長州藩も幕府も大金をはたいて最新の武器を買い揃え、武器の貧弱さや劣悪さを補いました。ところが、幕府側の軍事力は一方向に強化されませんでした。このことについて、研究者は、「内面の脆弱性」を指摘しています。すなわち、致命的な問題は、ハード面の軍備拡充に終始するばかりで、ソフト面の戦法導入が図られなかったことにあつたのです。

他方、幕府とは対照的に、長州藩では、三年後の幕長戦争までに西洋式戦法の導入を果たしていました。長州藩が、この本質的な軍制改革に向かう背景には、きわめて根の深い対外危機意識があつたと考えられます。

■長州と幕府の明暗を分けたもの

散兵戦術などの西洋式戦法を採用するきっかけを長州藩に与えたのは、この外国船砲撃の失

敗と、翌年の四か国連合艦隊による下関砲撃事件の衝撃でした。この軍制改革は、兵員の自発性や独立心を生かす発想を前提としたもので、政治面や社会面に強い影響を及ぼすことは避けられません。それを知った上での思い切った導入でした。

こうした内面的な弱さを克服しようと努力する長州藩の動きを評価した英国は、雄藩連合政権の実現に期待を寄せます。一方、武器の購入に伴って幕府の軍事力が強化されると考えた仏国は、幕府支持の立場を堅持しました。

(北林)



「下関に到着した連合艦隊」(元治元年ベアト撮影：長崎大学附属図書館蔵)

ジュリエの報告はSHM,GG2/40/8 Note sur la puissance militaire du Japon, par Julhiet, Avril 1864.(仏国海軍省史料)より転載(山本成生訳)

差紙

近世部会

携帯電話が普及し、相手がどこにいても簡単に連絡がとれるようになりました。デートの待ち合わせ時間や場所の変更もすぐできて、余程のアクシデントでも起きない限り、一昔前のすれ違いによる悲喜劇は生まれません。本当に便利な世の中になりました。

さて、左の写真は萩藩士馬屋原家に伝来した差紙（呼出状）です。上は表書で、「宍 八郎」（宍道八郎）が馬屋原輻あつめに宛てたものであることがわかります。下は本文で、「御用之儀候条、只今拙宅可被罷出候、以上」とあり、「御用」があるので、私の家まで来てくださいという意味です。具体的な用件は書かれていませんが、墨引の左に小さい字で「寛政十年（一七九八）午十二月廿四日、家督被仰渡候節」とあり、同日付の加判衆連署奉書が伝来することから、その受け渡しのための呼び出しであったことがわかります。それ自体は廃棄してもいいと思われる差紙も、藩から来たもので、大切にすべきと考えられたのでしょうか。

近年、手書きの手紙が見直されると聞きます。気持ち伝わり、残せば大切な思い出になるからかもしれないですね。（担当 河本・宮崎・小田）



馬屋原家文書（個人蔵）

明治維新部会

米国船の黄波戸来航事件

関門海峡における攘夷決行の約一年後、元治元年（一八六四）六月七日に山陰の黄波戸浦（長門市日置）で米国船に対する砲撃があったことをご存じですか。砲撃を受けたのは、蒸気商船モニター号でした。しかし、境川の千畳敷から打ち出された野戦砲の「弾」はほとんど届かず、届いた分も命中しませんでした。一方、モニター号から発射された三〇発の「砲弾」の多くは人家を貫通して、一二軒に損傷を与えたそうです。

この事件への対応を、『忠正公一代編年史』は「前略」老人・幼少之部は近村処々へ退家致させ、手道具等取片付させ、十三、四才以上強壯之者ハ内居、火の元用心家々水田子へ水汲せ候て、厳肅に守衛仕候」と記しています。黄波戸に住む人々に与えた衝撃の大きさが伝わってきますね。

英仏米蘭の四か国連合艦隊による下関への報復攻撃があったのは、この事件の二か月後、八月五日のことでした。この敗戦で長州藩は攘夷の不可能を悟ったとされていますが、黄波戸での事件も、藩論を転換させる上で重要な意味を持つ出来事だったのかもしれないですね。（担当 北林・岡松・村里）



『忠正公一代編年史』
（山口県文書館蔵）



千畳敷から黄波戸浦を望む

「いじぶみ」は語る

近 代 部 会

旧吉敷村（現山口市）出身の工学博士中原岩三郎は、東京帝国大学工科大学で電気工学を専攻、卒業後東京電燈に入社、欧米視察での知見を活かし、同社の技師として水力発電による大規模な電源開発にかかわり、山梨県から東京中心部への長距離高圧送電を実現させた功労者です。そのまま社団法人電気学会会長も務めた電気界の権威であり、藤岡市助とともに山口県出身の著名な電気技師の一人として知られています。

昭和五年（一九三〇）に完成した、山口と大田（美祢市美東町）を結ぶ県道改修にあわせて、吉敷と山口の中心部を連結する支線の建設が計画されました。多額の私財をなげうってこの計画を支援した中原岩三郎を称え、この接続道は地元では「中原道路」と呼ばれました。

石碑の前で足を止めてそのメッセージに耳を傾けると、功成り名を遂げた先人たちのふるさとへの想いを推し量ることができます。住宅が建ち並び、往来周辺の風景は一変しましたが、記念碑は、今日も変わることなく穏やかにふるさとの日常を見守り続けています。

（担当 浅川・古屋・木下）



かつての市道脇にたたずむ「中原道路碑」（山口市吉敷上東）。中原岩三郎は母校の奉安殿建立にも支援をよせています。



道路改修記念碑（山口市白石）。記念碑には、地域の歩みをひもとくたくさんのヒントが刻み込まれています。

歩いて渡って、いい眺め（関門橋）

現 代 部 会

今年には関門橋が開通して四〇年になります。関門橋開通直前に、橋からの眺めを歩いて堪能することのできた幸運な人たちがいたことをご存知でしょうか。この世紀のイベントが行われたのは、一九七三年（昭和四十八）十一月九日で、自動車専用道路として開通する十一月十四日の五日前の出来事です。

関門橋歩行見学会は、下関市・北九州市のそれぞれ九〇〇〇人ずつ（計一万八〇〇〇人）が片道一方通行で渡りきるというものでした。参加者は、健康な大人に限られ、写真撮影禁止、ガム・タバコの投げ捨て禁止などのルールを守ることを条件に、下関市では自治会ごとの抽選で、北九州市では公募によって、その幸運を手にしたのです。

当日は、多少の雨風はあったようですが、見学会はなんとか実施され、翌十日の『山口新聞』には「海峡の空を歩いた」「ただ感激の二〇分」「幸運に輝く笑顔」などの見出しが躍り、「これからは誰も二度と歩いて渡ることができないんだなあ、と考えると年にもなく何かすばらしいことをしている様な妙な錯覚に落ち入りますね。」など当時の声が紹介されています。

（担当 津枝・山本・中野・河村）



40年を迎える関門橋



歩行見学会の様子
（写真提供 下関市）

『史料編 現代4』いよいよ刊行へ

現代部会では、今年度刊行予定の『史料編 現代4』の校正作業を進めています。この巻では、一九四五年（昭和二十）の終戦から、昭和から平成へと移り変わる一九九〇年頃までを時期的な目安として、戦後山口県の産業・経済分野に関する史料を掲載します。

この巻で、まず注目していただきたいのは第一章です。「経済概況と開発計画」の章題を冠して、本格的な長期計画としては戦後初となる『山口県建設十年計画』（一九五九）や、それを引き継いだ『山口県勢振興の長期展望』（一九六二）に関する史料、幻と消えた広域開発計画構想に関する史料などを取り上げること、山口県が時代ごとに取り組んだ課題や目指したビジョンなどを浮かび上がらせ、戦後における県経済の状況が俯瞰できるように工夫しました。また、第二章以下では、農林水産業から、鉱工業、商業、観光・交通といった産業・経済の分野ごとに、注目すべき史料を整理しています。



右は『山口県建設十年計画』、左は『山口県勢振興の長期展望』（山口県文書館蔵）



『史料編 現代4』の校正作業



デジタル画像を使った作業



関門トンネル開通式 昭和33年3月9日（山口県文書館蔵）
フィルムからスキャナーで取り込んだデジタル画像の一例

『史料編 現代4』は、今日につながる山口県産業・経済の一端を明らかにする史料集として、ご期待いただけるものと思います。

編集に当たっては、表計算ソフトを利用して、掲載候補史料選定用プログラムを作成しました。ワープロ入力した翻刻原稿の一览から掲載したい史料を選択すると、全体の頁数とピックアップした史料の一览表（表題・年代・出典・所蔵先・登録番号など）、章・節・項ごとの史料数・頁数及び年代分布などを瞬時に把握できるようにしました。この結果、頁数調整も驚くほど早くなり、編集も格段に効率化することができました。

また、以前カメラで撮影したネガフィルムをそのままスキャン（パソコンで扱える画像データにすること）し、直接デジタル画像に変換する高性能スキャナーの存在も欠かせません。『史料編』の口絵として使用する写真の選定作業や、原本照合などの確認作業にも利用しています。写真店で現像するのではなく、ネガフィルムから直接画像データに変換し、パソコンに取り込むのですが、普通に写真を見る分には、ほとんど気にならない仕上がりで、技術の進歩には驚かされるばかりです。

『史料編 現代4』は、こうした新たな技術を活用しながら、目下校正の真つ最中です。（津枝）

明治を感じる

東京海上日動火災保険株式会社
取締役会長 隅 修三



「明治は遠くなりけり」と言われて久しいが、私は明治をごく近い存在と感じながら生きて来た。両親は明治生まれ。共に明治、大正、昭和、平成の世を生き、母は昨年百二歳で他界した。男ばかり八人の子を授かり、何事にも動じない穏やかで上品な女性だった。私の子供の頃、明治の面影は周りに転がっていた。母に連れられて親戚に行くと、食事には箱膳が並び、寝る時の箱枕に閉口した。大伯母様達は「忠さん（寺島忠三郎、母方の親戚）は「蛤御門の変」で最後に久坂玄瑞さんと刺し違えて自害なさった」などと話していた。我が家に入入りしていた爺さんは早朝からの正月用の餅つきが終わると、七輪の前でどてらの裾を開けたまま次々と餅を頬張りながら「日本海海戦の時にや、あの山に登って大砲の音を聴いちよった」などと大法螺を吹いていた。兄達には「この県で先生と呼ばれるのは吉田松陰先生お一人ぞ」とも教わった。

日露戦役の年に生まれた父は錦川上流の広瀬から萩中学に行き、松陰先生の兄上のご実家に下宿させていただいていた。父は学生時代、斎藤茂吉に師事していたこともある文人で、与謝野鉄幹、晶子夫妻とも親しくしていた。私も休みに帰郷するたびに、父と二匹の犬を連れて山林を見て回った。檜に絡み付いている蔓や雑木を鎌で切り払いながら。背筋を伸ばし多くを語らない凜とした人であったが、その父が言ったことを覚えている。「昔の道は今と違った。人が草鞋で長い年月踏み締めた道は心地よく弾み、幾ら歩いても疲れない道だった。」維新のあの頃、萩から、馬関から、京都、江戸へと皆歩いていた。その長さ、速さに驚く。歴史を読むとき、高杉晋作や桂小五郎達が歩き、走り回っていた彼らの足裏の感触に想いを馳せながら読むと、彼らの息遣いも、距離感も、時間感覚も、そして景色も違って見えてくる。

地域に根ざす・29



くまげ郷土史会

旧熊毛郡北部四か村（八代・勝間・高水・三丘）をエリア内に、平成四年（一九九二）「くまげ郷土史会」が発足しました。講師は徳山の清木素先生を迎え、古文書解読の他教育関係一般について幅広いお話をご教示いただきました。先生がお亡くなりになられて以後は、会員が各自研究資料を採り勉強してきました。

三丘領主宍戸家の家臣や庄屋・畔頭・旧家から文書資料を借りてお互いに解読研究をしました。

その他、お寺の古襖を一日がかりで剥ぎ、次回解読する、また各地に点在する顕彰碑・頌徳碑・墓碑銘などの拓本による記録や、明治・大正期の小学校教科書の内容を現在のものと対比もしました。

何でも古いものには関心をもって当たっていますが、近年多くが処分されたり散逸している事は大変残念に思います。

当地で知られているものに「孔子聖廟徳修館」があります。文化三年（一八〇六）郷校として創立され、弘化三年（一八四六）孔子の他四聖人を祀り、今日まで顕彰保存会によって保存されています。平成二十一年（二〇〇九）秋、中国山東省より高さ二メートルの孔子像が贈られ、落成式と同時に「孔子稊菜」の儀が厳粛に行われました。

他には毛利元就七男元政によって建てられた「毛利元就菴廟」（宝篋印塔）があり歴史的由緒のある様々な遺跡・史跡があります。

（代表 岩崎 章）

連絡先 周南市安田三丘徳修館
電話 〇八三三一九二一〇一七七



県史刊行の

お知らせ

◆今後の配本予定巻についてお知らせします。

『史料編 近世7』は、県内外で収集した史料の中から萩藩・支藩の武家文書と、萩藩領周防部及び支藩領の地方・町方等の史料を収録します。

『史料編 幕末維新7』は、長州藩明治維新史を多様な視点から解明するため、民衆意識、宗教関係、文教関係等の史料の他、下関攘夷戦争に係る海外史料を収録します。

『史料編 近代3』は、大正デモクラシーから、第二次世界大戦終結までの時期を対象とし、中央集権的画一化が進行する中で、本県の政治・社会・文化等の史料を収録します。

『史料編 現代4』は、戦後の混乱から高度成長を経て現在に至る日本経済の変貌と関連させて、本県経済の発展と構造転換の歴史を明らかにするため、産業や企業活動、経済事情に係る諸史料を収録します。

『通史編 近代』は、廃藩置県から第二次世界大戦終結までの本県の歴史を、多様な歴史的要因に目配りしつつ、幅広い視野から描き出します。どうぞご期待ください。

こちら 県史編さん室

去る十月十九日、山口市の山口県教育会館を会場に、第二二回山口県史講演会を開催しました。

講師は、山口県史編さん委員・現代部会長の高嶋雅明先生（和歌山大学名誉教授）で、「開発計画と山口県経済―「農工商全」論から「周南開発」へ―」と題して講演されました。

戦後、県域経済を戦争の荒廃から浮上させ発展を目指すために策定された各種の開発計画が、山口県経済において果たしてきた役割等について、専門的見地から語られた講演は、大変興味深く、参加者にも好評でした。



講演中の高嶋雅明先生

山口県史の構成・刊行計画（全41巻）

【通史編】 6巻

既刊 原始・古代

既刊 中世

近世

幕末

近現代

既刊 現代

既刊 【民俗編】 1巻

既刊 【史料・資料編】 33巻

既刊 考古1（原始）

既刊 考古2（古代以降）

既刊 古代（古代史料）

既刊 中世1（記録）

既刊 中世2（県内文書1）

既刊 中世3（県内文書2）

既刊 中世4（県内文書3・県外文書・文学資料）

既刊 近世1（政治1）

既刊 近世2（政治2）

既刊 近世3（経済1）

既刊 近世4（経済2）

既刊 近世5（文化）

既刊 近世6（諸家文書1）

近世7（諸家文書2）

既刊 幕末維新1（政治・社会1）

既刊 幕末維新2（政治・社会2）

既刊 幕末維新3（政治・社会3）

既刊 幕末維新4（政治・社会4）

既刊 幕末維新5（経済）

既刊 幕末維新6（軍事）

幕末維新7（文化・海外史料）

既刊 近代1（政治・社会・文化1）

既刊 近代2（政治・社会・文化2）

近代3（政治・社会・文化3）

既刊 近代4（産業・経済1）

既刊 近代5（産業・経済2）

既刊 現代1（県民の証言 体験手記編）

既刊 現代2（県民の証言 聞き取り編）

既刊 現代3（言論・文化 プランゲ文庫）

現代4（産業・経済）

現代5（政治・社会）

既刊 民俗1（民俗誌再考）

既刊 民俗2（暮らしと環境）

【別編】 1巻

年表

山口県史だより 第30号

平成25年11月25日発行

編集・発行／山口県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL 083-933-4810

FAX 083-933-4869